

かまいり茶用新品種「いずみ」について

讃井 元*・安間 舜*

SANAI, H. and AMMA, S. On the New Variety
of Tea Plant "IZUMI".

1. まえがき

中共茶と競合関係にある北アフリカ市場を確保して、日本緑茶の輸出を進展させるためには、蒸製緑茶よりも品質上にも嗜好の上にも中共茶に近いかまいり茶の量産と質的向上を図らねばならない。このため最緊急事として輸出向かまいり茶用品種の育成が強く要望され、九州農業試験場においては昭和27年研究室新設とともに鋭意育成に従事してきた。

このたびかまいり茶標準品種「たかちほ」を凌駕する多収にして輸出向としても品質すぐれた新品種「いずみ」を育成することができたので、その育成経過並びに特性の概要を述べ奨励普及の参考に供する。

2. 来歴並びに育成経過

かまいり茶用品種育成に当り、当時かまいり茶の解明はほとんどなかつたので、まず各種の茶樹を各地より収集し、試製して品質検定を行ない、これと茶葉の形態との関連を求めた。この結果、葉肉厚く、葉の内部形態緻密で同化組織厚く、細胞の粗密度の大きいものがかまいり茶に適すること、またこのような茶樹は支那種・台湾種および南支那×アッサム種の後代に多いことがわかつた。そこでこれらの茶樹の実生選抜に重点をおいて育成をすすめた。

「いずみ」は昭和8年福岡県農事試験場筑後分場において、紅茶を目標としては種した「べにほまれ」の自然実生より選抜したもので、昭和25年農業試験研究機関の整備総合により九州農業試験場において引継ぎ、昭和28年有望系統として At-5371 の系統名を附し、輸出用かまいり茶としての特性能力を検定し、品質すぐれ中共茶に匹敵すると業界の批評を得、昭和

35年登録されたものである。

3. 特性の概要

母系「べにほまれ」より樹勢、耐寒性まさり、樹姿は直立、樹勢甚だ強く、葉形は並葉楕円形で中葉に属し、葉色緑芽え、葉身反転・縁辺屈曲少なく、葉面に皺曲があり、着葉角度は狭い。葉厚は「べにほまれ」よりは薄いが厚い方に属する、耐病性は網餅病に弱い傾向があるが、「べにほまれ」に類発する枝枯病は少ない。また再生力は大きく、さし木繁殖は甚だ容易である。

摘採期は中生で4月30日「べにほまれ」より11日早く、「たかちほ」と同期である。

収量は甚だ多収で10アール当り1,000 kg、たかちほの2倍以上で茶期別収量割合は一二三番各茶期平均し、夏茶収量多く、一番茶を主とする「べにほまれ」とは著しくことなる。

品質は優秀で「たかちほ」とことなつた特徴がある。外觀は形状締りよく、色沢緑色で僅かに黒味を帯びるが光沢があり、水色はやや淡金色で、特殊な香氣があり、滋味はコクがある。日本茶輸出組合その他の審査結果は、形状色沢ともに申分なし、水色は概して淡いが橙黄色で澄明、香氣は支那風スペシャルと同じく、滋味にコクがあり、砂糖を加用しても香味消えず、輸出茶として申分ない批評を得た。

4. 栽培および加工上の問題点

樹勢強く、直立性で伸長旺盛であるので、初回せん枝は軽いせん枝よりも地上15 cmに強く行なう方が有効枝条の発生多く新梢長も長く勢力が強い。従つて強いせん枝の方が早期に成園化できる。着葉角度が狭いので摘採が容易、その上茶芽の伸長が早いので精良摘

* 九州農業試験場

みを励行すれば8月中旬までに6回摘みができる。

病害に関しては網餅病に弱い傾向があるので薬剤撒布を励行する必要がある。

製茶法は、標標準製茶法よりもやや温度を高くするがよい、なお夏茶に苦味を帯びることがあるので、輸出向に仕上げる際に蒸熱加工するがよい。

5. むすび

新品種 はずみ は品種間には輸出向として極めて好適で、その上収量著しく多く、「たかちほ」の2倍以上の収量が得られるので、今後期待される面が多い。なお「はずみ」は内需用としては香味が強すぎるきらいがある。